BJ 史のひ ح ま (第十七回)

須恵の眼科医① 天草の人・高場順世

B

出される人が多いようです。 目薬と言えば、 は多い。名を聞き知っていなく 須恵目薬」を記憶している人 今でも福岡市の年配の方々に 紅絹に包んで貝に入った なつかしく思い 当時の上須恵

格の石炭鉱業を 業(主として目薬) 村・須恵村に盛んになった製薬 期までは 江戸時代から、 別

産業の一つでし 除けば、たしか に須恵の主要な

地に住んでいた 江戸時代から当 ではありません。 須恵目薬だけ

> 二人の眼科医、上須恵村の田原 うのも、 たこととあわせて、 療宿場」が形成されていたとい 上須恵区、 な特色となっています。 のための宿屋もでき、 の周囲には、) 存在も見逃せません。 須恵村の岡氏(本姓高場氏 製薬産業の盛んであっ 須恵区では今も屋号 治療に訪れる人々 町史の大き 一大「眼 両眼科 現在の

が残っていることが知られてい

は戦後の一 ます(後述

高場順世先生墓

(A)(A)(A) (A)(A)(A)

しょうか。 歴史は、 須 恵の眼科医・宿場・ いつから始まっ たので 製薬の

くだんの記者も、 なし、 ちろん、これは単純な誤解で、 解が、ばくぜんとゆきわたって ずれて肩を落として帰って行き か、 ら福岡にもちこんだのではない 岡山で目薬販売を手がけて財を 須恵で盛んだった目薬製造は ました。 あった福岡藩主黒田家が岡山か わざわざ取材に見えましたが、 いまり この点については、これまで と調査に来たのでした。 先日も、神戸新聞の記者が 誤解されている点もありま 「目薬大名」のあだ名も 知られていなかっただけ しかし、このような誤 もくろみがは ŧ,

人で高場順世という人物です。 いるのは事実です。 須恵の眼科の始祖は、 天草の

これは江戸時代の記録ではっき についても、 ば、 りと知ることができます。 最近発見された史料によれ 須恵目薬の代表格「正明膏」 順世の「秘伝」 さら て

もさかのぼる歴史をもつことが 目 明らかになったわけです。 に亡くなっていますから、 あると書かれています。 「薬や眼科の歴史が三百年以上 順 世はちょうど三百年ほど前

須恵

今、

江戸時代の記録

筑前国

の所に記せり。 行わる。 又治療をよくせり。 験を得る者多し。 続 ともに高場順世が伝を得て世に 高場正節と云眼科居れり。 いで方伎を能す。 拾ってみましょう。 特に妙術を得たり。 言眼科医師居れり。 (上須恵村) (土記付録」から関係記事を 医道伝来の事は内橋村 此村に田原養トと 又須恵村にも 養卜子孫相 しばしば其 養卜・正節 青目の治療 是i も

8/8/8 8/8/8 8/8/8

あったということです。 眼科がい 0 [内橋村] 項をひきます。 そこで内橋村(て、 此村に中村又七 周囲には (現粕屋町内橋 ここにも中村 宿屋 (髪 が

> る。 えり。 世と号す。 村中茶屋と云所に墓有。 三年十一月に死す。 あらたむ。 を薙て宗宅と改む)と云眼科あ なりて伝を得たり。 節・中村宗宅など皆渠が門下と 嗜みければ医となり名を順世と 此村に来りぬ。 なり当国に来り彼方此方さまよ 天草にありて高場進士兵衛とい けるが、よすがありてついに 此時より田原養ト・高場正 其医伝は高場順世より出た 順世はもと寺沢志摩守領内 志摩守落去の後、 治療を能し世に行わ もとより眼科を 順世は貞享 子孫なし。 容認と 順

されていますが、 順世の死後三百年をむかえます。 町内に墓がありま 八六年にあたっています。 書かれており、 で内橋村に順世の墓があると記 裏づけられます。 高場順世の流儀を伝えていると 村の三人の眼科医は、 前の年号で、 このように、 その三年は一六 他の史料からも 田原・高場・ 貞享は、 は現在須恵 もうじき いずれも ربرب 元禄

(町誌編集委員会事務局) (以下次号に続く)